

第三章 教育と文化

第一節 学校教育

一 中世の教育

日本人は大むかしから教育に熱心な民族だった。

周囲を海にかこまれている島国日本では、隣りの国と地続きの大陸の国ぐににくらべると、文化や風習が自然と流れこんでくることが少なかった。中国や朝鮮のような先進国の文化をとり入れるためには、進んで努力をする必要があった。

たとえば、文字や仏教の伝来が、民族間の自然な交流の結果としてではなく、歴史上特定の年の特定の出来事

として記録されているのは、その事の重大性が、しっかりと印象づけておかねばならないからである。

海の向こうからすぐれた人物を招いて、各種の部門での業務に生かし、あるいは指導者として知識や技術を日本人に伝達させた。

国家が成立して、外交ルートにのっとって使節を派遣するようになると、留学生や留学僧たちが従行して、長期にわたってかの地の文物や学問を学んで帰朝し、それぞれの分野で先覚者となった。

政府は大学寮を設けて、国家のために人材を養成した。有力な貴族も自分たちの学院を開設して、氏族の子弟の教育にあたった。

平安貴族たちが衰えていったあと、伝統をうけついで学問文芸の場となったのが、大寺院である。のちには僧だけでなく俗家一般の青少年をも受け入れて、武士や庶民の富有階級の子弟が寺入りして、学ぶようになった。

これが大寺院から広がって、地方の小さな寺々にまで及び、世俗的教育が行われるようになったのが、江戸時代の寺小屋の起源となった。

二 寺小屋の時代

徳川家康が江戸に幕府を開いて、学問を奨励したこと
から、富有階級ばかりでなく一般庶民の間にも学問が広
がっていった。

学問が国家のためでなく、個人の教養として生かされ
ることになったのである。また庶民にとって学問教養を
身につけることが、出世の手段ともなった。少なくとも
経済の発展によって、読み書き算盤は、人並みの生活を
するのに大事な能力となっていた。

このために中世から寺院で行われて来た寺小屋が、地
方のほとんどの小寺でも開かれ、そればかりか俗家でも、
心得のある人が子どもたちを集めて教え、これらもやは
り寺子屋と呼ばれた。

寺子屋の数は、江戸末期の最盛期には全国で一万五千
余に達したとのことであるが、その多くは土地の有力者
の副業的な経営であった。

日田では豆田の有浦琴虹・蓬園母子が名高い。二代に
わたる教え子が三五〇〇人に及んだとされ、門弟たちに

よって頌徳碑が建てられているが、その中に羽野の横尾
忠右衛門の名もある。

広瀬淡窓の父桃秋も、近所の子どもたちに読み書きを
教え、使い古した筆を羽野天満宮の境内に埋めて、筆塚
を建てている。

三花では資料が残っていないので、はっきりしたこと
は明らかではないが、財津の竜川寺で開かれていたとい
う。

羽野では天満宮の祠官で、咸宜園にも学んだ菅野兼之
が、学校開設以前に、子弟を教授したといわれている。

伏木でも山本庄屋宅で開かれていたし、伏木ばかりで
なく小河内からも更原を越えて習いに来ていた。天保年
間の資料によると、伏木では、「童子教」「実語教」「国
づくし」「商売往来」「千字文」などの、当時一般的だっ
た書物がテキストに使われていたという。

ほかの地域でも、何らかの形で寺子屋に類するものは
あったであろう。

三花に残されている古文書の中に、会所や庄屋文書な
どの公用文以外の私文書にも、書かれたその筆の文字に、
公用書体のお家流の崩し方が、明らかに一応の習練を経

ていると思われるものがある。それなりに、何かの形で書を習い文章を学ぶ機会があった、としなければならぬ。

三 咸宜園に学んだ人びと

寺子屋が庶民の基本的な教養の教育機関であったのに対して、武士階級には藩校があり、もっと高度な学問の場として、私塾があった。

藩校は大名の各藩が直接に開設、経営した学校である。幕府の昌平黉を頂点にして、小は玖珠・森藩の修身舎のような、一万石そこそこの小藩に至るまで、幕末には三〇〇を算えるようになっていた。

藩士とその子弟に対して、武士の道徳を教育し、人材を育成して、藩政改革の実を上げることが期待したのである。

いわば公立ともいべきこれら藩校の、もう一方にあったのが私塾である。

私塾は、学問を好んだ有志によって自発的に開かれ、身分や階級にこだわらず誰でもが、入門できるのが一



咸宜園跡の秋風庵

般だった。

教育の内容は、寺子屋終了後の中等教育的な塾から、藩校をものぐ高等教育機関と目される有名塾まで、さまざまであるが、教師と弟子との人間的なふれ合いを基調とする個性的な教育方針は、いずれも変わらぬものであった。

一五〇〇もあったといわれる私塾の代表的な一例が、わが日田の、広瀬淡窓の咸宜園である。

咸宜園は、桂林園に続いて淡窓が創設した漢学塾である。三奪法や「いろは歌」に見られるように、武士、神官・僧侶、医師、農工商等の各階層の誰でも一様に受け入れ、めいめいに応じた勉学ができるように、新しく自由な教育が行われた。

したがって、土地が天領だったことも加わって、全国六四カ国からの入門者約五千名という、九州の山中の町としては驚異すべき繁盛を誇るようになった。

しかも淡窓歿後も、その後継者によって明治の学制施行の後まで、私学校として経営され続けた。

もちろん三花からも入門する者があった。入門簿によると、次の三〇名である。

三花地区出身咸宜園入門者

出身地	氏名	年令	入門年月日
羽野村	菅 竜淵		文化15・4・12
〃	役 豊記		文政元・4・26
財津村	浦塚秀太郎		〃 4・6・16
藤山村	財津圓八		〃 10・1・17
羽野村	松本要人		〃 12・1・21
竜川寺	釈 慧門	16	天保5・2・22
竜川寺	釈 智明	14	弘化2・8・7
羽野村	松本百市	11	嘉永2・1・24
用松村	照妙寺 恵実	14	安政4・2・18
羽野村	竺 須栄	24	〃 5・9・11
用松村	川野真彦	16	〃 7・2・24
〃	照妙寺 謙州	11	文久3・9・18
秋原村	釈 澄海	14	元治元・6・6
藤山村	本庄敬次郎	12	慶応2・1・18
用松村	広瀬範造	15	〃 3・2・28
羽野村	横尾忠右衛門	36	〃 3・4・11

羽野村	大内三次郎	17	慶応3・4・11
秋原村	財津範四郎	25	〃
用松村	広瀬寿平	17	〃
藤山村	多鶴蔵	15	明治3・1・17
花月村	桑野甚五郎	41	〃18・2・25
三和村	田辺善淳	15	〃
〃	吉川伝次郎	13	〃18・2・28
〃	菅野兼太郎	13	〃19・4・19
〃	横尾陸之助	14	〃19・4・16
花月村	本荘仙吾	15	〃19・5・3
三和村	山上丑太郎	15	〃20・2・2
花月村	本荘雄吉	13	〃20・9・4
三花村 13番地	安岡仙作	13	〃22・10・2
三花村	日野保	14	〃29・6・24

淡窓は安政三年十一月に死去しているから、右のうち
実際に淡窓に接したのは、医師の悴だった松本百市（要
人はその兄）までであろう。

神官・寺院の徒弟、医師・庄屋・村役人階級の子弟等

がほとんどなっている。

管竜淵は樵禪の号で、後に京都の妙心寺長老となった
名僧である。

釈惠実が高取成章、釈謙州は同悦堂の兄弟でそれぞれ
県官吏、裁判官として活躍している。

広瀬範造・寿平は、広瀬家の祖五左衛門が豆田の家を
長男に譲って隠居した、用松の広瀬家の出身で、用松村
庄屋の家柄である。

横尾忠右衛門も羽野村庄屋として、数々の功績を残し
ている。

いずれも郷土の開明のために働いた人びとである。

四 明治の学制改革

明治新政府は、国家の発展は西欧の新しい文物をとり
入れるのが急務だとして、学制の改革整備に力を注いだ。

明治五年八月、「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の
人なからしめん事を期す」という有名な文言を含む「学
事奨励に関する被仰出書」が公布され、同時に、全国を
八つの大学区に分け、その中を中学区、小学区と細分し

て、おのおのの学区に大学、中学、小学校がそれぞれ設けられることとなっていた。

この学制の制定、推進にあたっては、日田郡馬原村の出身で咸宜園の俊才、長三洲が、明治五年二月文部少丞、同年一〇月文部大丞として大いに尽力した。

九州は第六大学区となっていたが、国民皆教育の義務のもとに、まず小学校の整備が進められた。

日田では明治六年の堀田学校（後の月隈小学校）大肥学校（同じく静修小学校）に続いて、明治七年一〇月一日、三和村財津竜川寺内に三和学校、花月村一ノ瀬に民家を借りて花月学校が開設され、近代学校教育の第一歩を踏み出した。

村には学務委員が設けられ、戸長などの有力者が就任することが多かった。

小学校のうつり変わりは、次に述べるが、まず学務委員がどんな仕事をしていたのか、それによって教育がどんなふうに進められ普及されていったか、が想像できるので、少し時期は下がるが、大正九年に、花月小学校学務委員を勤めていた後の第四代村長日野順一が、表彰された文章を掲げてみよう。

日田郡三花村花月小学校学務委員

日野 順 一

明治四十三年七月就職以来設備ノ改善ニ尽力シ青年
団農事小組合等ノ幹部トシテ其ノ指導啓発ニ努メ学
校諸会合ニハ常ニ出席之ガ幹旋ヲナシ時ニ自費ヲ投
ジテ就学奨励ノ資ニ供シ又遠ク学事視察ヲナシ以テ
直接学校教育社会教育ノ発達ニ資スル等其ノ功績顕
著ナリトス 仍テ本会旌表現定ニヨリ（中略）之ヲ
旌表ス

大正九年六月二十日

大分県教育会支部日田郡教育会長

正五位勲四等 出 事

創成期の指導者たちの苦勞を、通^ル一^遍の素^ツ気^ナい
この文章からでも、思^ハい^ハや^ルこ^トが^デき^{ヨウ}。

五 小学校の変転

三和地区の学校教育の中心となつて来た、小学校三校
の推移を、年代を追つて述べてみよう。

明治五年の学制施行の当初、小学校の課程は上下二等としてそれぞれ修業年限を四年ずつとされた。

明治七年一〇月三和村財津竜川寺内に開設された三和学校、花月村一ノ瀬の花月学校は、下等四年のみだったのだろう。三和校は、竜川寺内に以前から寺小屋が開かれていて、これがそのまま学校に移行したのであろう。児童数五〇名。

明治一一年三月、伏木の山本庄屋宅の上の空地に、花月簡易学校の分教場が開設され、伏木、小河内地域の児童が通学した。

明治一三年、三和校の児童数が追々に増加して、校舎が手狭まになって米たので、用松の中村に民家を借りて移転した。

翌一四年、さらに通学上不便があったので住吉の民家屋に移転。道をはさんだところに運動場があった。児童数は一〇〇人あまりだった。

同年、花月校は秋原に校舎を新築して移った。

明治一二年に教育令を公布、翌一三年に同法改正。明治一九年の学校令によって、制度そのものは一応の整備をみる。

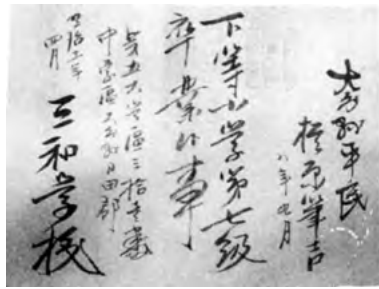
すなわち、上等下等の課程に代わって、同じく修業年限を四年ずつとする尋常、高等の各小学校とし、尋常四年の就学は父母の義務であることを明確に規定した。

三和、花月および伏木分教場の三校は尋常小学校のみで、高等小学校は日田町に一枚だけ設置された。

就学は義務となっても学費は自己負担なので、家の労働や家計のために早くから子どもも働くことが要求された。家庭などでは、就学を拒む者も多く、授業料を免除、修業年限も一年短縮し三年とした簡易学校が認められた。

明治二〇年四月以降、三和、花月両校に簡易科が併置され、伏木分教場は簡易学校となった。

しかし、これも明治二三年一〇月の法令改正によって、廃止され、明治二五年には再び三和尋常小学校、花月尋



明治11年の卒業証書

常小学校、同伏木分教場とされた。

同年から西有田村小河内、北平、穴倉が花月校に、三一年からは同村坂本が三和校に、一時児童を委託した。

明治三二年、伏木分教場校舎を杉山に改築。

明治三四年、三和校は用松の住吉に職員室を兼ねた仮校舎を建てて、一・二年は中村の民家の教室で、三年から住吉の本校で学んだ。児童数は二〇〇余人となった。このとき同校に子守学校が併設された。

子守学校というのは、弟妹などの乳幼児を連れて登校してくるので、授業中はその児を預かって保育する、というシステムである。ただしその労力や経費はその小学校の教員や有志の奉仕によるもので、どのくらい継続したのかは不明である。これは後の託児所、保育所の母体となった。

明治四〇年小学校令を改正、義務教育年限が延長されて六年となり、高等小学校は二年制とされた。

これによって翌四一年四月、三和校に高等科を置いて三和尋常高等小学校と改称、日田町の高等小学校に通学していた児童たちも、こちらへ就学することになった。

伏木分教場では四年まで通学し、五年生は花月校で、

六年生は三和校で学んだ。明治四三年以降は花月校からも、住吉の三和校に通ったという。

この頃の児童数は、三和校の尋常科一九一名、高等科一一名、伏木では二〇名足らずだった。

大正元年九月一日、花月校の新校舎が市ノ瀬の現在地に竣工。

同年一〇月一三日、三和校が現在地貞清に校舎を新築、移転。花月校に通っていた藤山が三和校区に移ったあと、花月、伏木の六年生は地元花月校に戻るようになった。

昭和四年四月、花月校に高等科を併設、花月尋常高等小学校となる。

日本は次第に軍国主義に傾いて行く。

昭和一〇年四月、青年学校令を公布。後述するように、三和校に三花村青年学校が置かれる。

昭和一六年三月、国民学校令を公布。三和国民学校、花月国民学校と改称。

昭和二〇年太平洋戦争の終結に伴って、教育も学校も大きく変わった。

昭和二二年三月、教育基本法、学校教育法を公布。新学制は小・中・高校・大学の六・三・三・四制となり、義

務教育年限も新しい中学までの九カ年に延長される。四月、三和小学校、花月小学校と改称。

昭和二三年四月伏木分校の新校舎が久原鶴に落成し、翌年、五・六年生が花月校から復帰した。

昭和三十一年四月、花月小学校伏木分校が独立して、伏木小学校となる。

三花地区に育った者にとつて、三校はそれぞれ深い思い出のある、心のふるさとである。その長い長い歴史が、まだいつまでも続くことを願わずにはいられない。

六 中学校の推移

(1) 旧制中学校

明治五年の学区制に基づく中学校は、一府県一校という制限があつて、日田町にすら設置されず、県内でただ一校、大分市に開設されただけであつた。

明治一九年の学校令に於ても変更はなく、明治二四年の改正に至つてはじめて、この制限が撤廃され、高等学校にも適用された。

この頃、日田では明治一三年に郡立教英中学を設立し

ていたが、一九年には廃止され、その跡地に日田町高等学校が設置された。

その後二四年以降も、県内の他の地域にくらべて、中学校設置は遅々としてはかどらず、やっと明治三五年に大分県立農林学校を設立。この農林学校は、大正一四年に日田山林学校、昭和五年に日田林工学校へと変転して行く。

明治四〇年、日田郡立工業徒弟学校を設立。四五年、郡立工芸学校と改めて女子部を設置。

この工芸学校女子部は、大正四年に日田郡立実科高等女学校、七年に日田高等女学校、一二年に県立に移管したのち、昭和の終戦後、旧日田中学と統合して男女共学の新制高等学校となっている。

郡立工芸学校本体も、昭和一三年に県立日田林工学校に統合される。

こうした機運の中、郡内からの熱望に応えて、大正一〇年四月、県立日田中学校が開校した。

これらの諸学校には、三花からの進学者もあつたが、初期の頃はその数はごく少なかっただろう。

そのうち、日田高女の大正八年第一回卒業生に、羽野

(天神町)の宮川(のち三苫)竹子がいる。

また、日田中学の大正一五年第一回卒業生には、竹子の弟宮川泰孝がいる。

宮川姉弟は医師宮川文一郎の子で、泰孝は小中学校の校長を歴任の後、日田市教育長を勤めた。剣士としても画家としてもよく知られている。

二人の間の、女医となった梅子もまた日田高女第三回卒業生である。

このほか現在の日田市には、昭和一四年日田家政女学校として発足した私立昭和女子高等学校、戦後の設立にかかる県立三隈高等学校と私立藤陰高等学校がある。

(2) 新制中学校

昭和二二年三月、新しい教育基本法、学校教育法が公布された。

ここに至ってはじめて、教育は真に個人の確立をめざすものとなった。

学制も改められて、小学校六年、中学校三年、計九年の修業年限が義務教育とされた。

ここで生まれた中学校は、従来の中学校とは全く異なるもので、教育内容、設備とも整備が急がれた。

三花地区では、天神、清水、財津、藤山の各町が北部中学区に入った。他の町内の生徒は、花月小学校内に設置された北部中学校花月分校に通学することになった。

花月分校は昭和三一年、花月中学校として独立、さらに二年後の三三年四月から、小野中学校と統合して、校名も戸山中学校として藤山町の新校舎で発足、今日に至っている。

七 青年学校

明治二六年十一月、実業補習学校規則を公布。

大正一五年四月、青年訓練所令を公布。

この実業補習学校と青年訓練所とは、多少の相違はあるものの、基本的には、義務教育終了後の青少年に、補完的に教科授業を行い、あわせて軍事教練を施そう、というものであった。

互いに競合するこの二つの施設を統合して、とくに心身の訓練の効果を挙げようということで、昭和一〇年四月、青年学校令が公布され、さらに昭和一四年四月からは、その義務化がはかられた。

三花でも一村一校として、それまで設置されていた青年訓練所を廃して、昭和一〇年四月、三和小学校に三花村青年学校を併設した。

はじめ理科教室を専用教室に使用していたが、次第に間に合わなくなったので、財津の村役場横に独立校舎を建設して移転した。すなわち教室兼作業場一棟、畜舎二棟、堆肥舎一棟と、作業地一町六反を持った施設となった。

しかし戦局が苛烈になってゆくに従って、軍事教練が強化され、勤労奉仕など戦争遂行に必要な労働力として動かされるようになっていった。

そして終戦とともに消滅する運命にあった。

八 託児所、保育所、幼稚園

学齢以前の幼児にも、何らかの形で保育の機会を与えたいということは、早くから考えられていた。

先に述べた子守学校などはその一つの例であるが、それは子守をする児童の方に視点が向けられていた。この流れの先にあるものが託児所と保育所である。

これに対して幼稚園は、幼児自身を教育の対象とする。いまのところ両者は、福祉施設と教育機関という分け方をされているが、その一元化が課題となっている。

(1) 託児所

日田では常設託児所は、昭和二年からの豆田・報恩舎と、九年からの三芳昭和園があった。

三花では季節託児所が開設されていた。

残っている簡単な記録から見ると、昭和二年六月二〇日から一週間、つまり田植えの農繁期間に、三和託児所を開設している。場所は三和小学校の校舎を利用。女性教員や地区の有志婦人の奉仕によって、



伏木の託児所風景

朝七時から点灯時頃まで、満四才以上の幼児をあずかった。六〇名から七〇名程度の幼児が集まった、ということである。以後毎年開所の例になっているが、終戦を挟んで戦後も継続したのであろうか。

花月託児所もほぼ同じ時期、同じ内容で開所したようである。

伏木の季節託児所は農協婦人部によって、昭和三七、三八年の両年の初夏と秋の二回ずつ、伏木小学校講堂に於て実施された。

(2) 保育所

前の託児所の幼児数からも推測できるように、託児の要望はかなりあったと思われるが、三花で本格的に開設された保育所は、戦後の児童福祉法によって、昭和三五年四月財津竜川寺に開園したるんびにい保育園である。

いまのところ、これが唯一の地区内の保育所となっている。

(3) 幼稚園

幼稚園は学校令に基づく教育機関で、戦前の日田には、大正一二年創設の豆田の愛児園（いまの月隈幼稚園）と、同一五年創設の隈の三隈幼稚園との二園だけがあった。

愛児園には少数だが天神・清水の町内から通園する園児もあった。

昭和三四年四月になって、西有田・中尾に本園のある緑ヶ丘第二幼稚園が、天神町に開設される。

義務制の小中学校にくらべると、保育所や幼稚園は地域との接触度が薄いように感じられる。園の方でも種々工夫をしているようであるが、地域としても方法はないだろうか。

とくに最近はその数も減少する一方、幼児を対象とする塾や学童保育の問題も生じている。幼稚園のあり方にも考慮の余地がありそうである。

第二節 社会教育

江戸時代、幕府・領主たちは、下じもの教化にたいへん熱心だった。訓戒の布告もたびたび発せられた。読んで字のように、民を教え導いて良化しようというのだ。明治になって政府は、教化を思想善導と云い換えて、もっと組織的・意図的に行っていく。

明治一八年、文部省の職分に通俗教育という領域が組みこまれる。大正一〇年に、これが社会教育課と改称され、昭和四年には社会教育局に昇格する。

そしてその対象は、最も純粋で効果の挙がる青年、婦人層に向けられてくる。

一 青年団

青年たちが一軒の家に集まって、その宿元と宿親・宿子の絆を結ぶ、そういう若者宿のシステムは、三花では存在しなかったらしいが、これに類する若者たちの集い

の場はあったにちがいない。

彼らは地域共同体であるムラに承認された自治集団であって、祭りや草刈りなどの共同体の行事や活動に参加しながら結束を固め、やがてムラ共同体の成員にと成長して行く。

明治末年、男子は青年会、大正一二年頃女子は処女会という組織に統一される。

この組織は、村立の実業補習学校・青年訓練所・青年学校などが設けられることによって、青年集団員即学校生という、二重組織に組み入れられていつてしまう。

そして青年会、処女会も解体して、青年団に統合され、大日本青年団という全国組織にまでつながることになる。

その中で、三花青年会員の記憶に残っている行事があった。

昭和三年、昭和天皇の即位御大典記念行事がいろいろ行われたが、青年会では支部毎に桜を植樹した。

財津では花月川沿いの道路傍に、約百本の苗を植えたが、見事に成長して花時には人々の眼をたのしませた。対岸の岡本側の草地に莫盛を敷いて花見て賑わった。この桜の木のために路肩がはつきりして、うっかり川に落

ちる者がなくなったという、思いがけない効果があったそう。

羽野から用松にかけての渡里川畔にも、この頃植えたのが並木をつくって、春は花、夏は木陰を提供してくれていた。

この花月・渡里川畔の桜並木は昭和三〇年代まで人び



江口清博氏描く桜並木

桜並木記念碑



とに愛されていたが、道路整備のために伐られてしまった。しかし今も豆田の画家江口清博氏を描いて置いた油絵の中に見られる。

日本が戦争に突入すると壮丁

が出征して、働き手が少なくなってくる。青年たちにも勤労奉仕が課せられる。

日中戦争の初めのころ、女子青年団員七、八名ずつ毎日交代で、村役場の公会堂に集まり、満州や北支などの兵士に送る慰問袋に入れる防寒着のため、繭から真綿を引いた。

戦局がますます苛烈になるにつれて、男子青年はおおかた戦いに出、村にはほとんどいなくなった。

二 婦人会

婦人の組織は、はじめムラ共同体の一部というよりは同志的な集団であった。すなわち、大正一二年一月に竜川寺に会員二〇〇名の明照婦人会が結成される。

昭和六年一二月には、文部省の方針に沿って、村長を会長とする三花村婦人会が会員五〇〇名で創立。さらに昭和一二年には大日本国防婦人会に連なる三花村国防婦人会となる。

婦人の集団が村の角かどに目立つようになって来た。象徴となったエプロンをつけて日の丸の小旗を持って、軍歌を歌って。

婦人会は出征する兵士を送り、戦死者の遺骨を迎え、婦人どうしの最低の生活を守るための相互扶助の役割になった。

そのうちに、他人の生活どころではない時代がやってくる――。

三 村農会、戸主会

これは厳密には社会教育団体とは云わないが、家の大黒柱となる男たちの集団である。しかし、村の生活全般に気を配り、大事な行事を執行し、村のいろいろなことを取り極める。彼らがしっかりしていなければ、村は成り立って行かないのである。

とくに農会は村の機関の一つとして、人びとをリードし、社会教育を行う立場にあった。

以上のような諸団体がどういう状況だったか、昭和一五年の『三花村誌』を見てみよう。

戸主会、婦人会は何れも春秋二回の総会及其他随時村内外の名士の講演会等に依り村の実状を自覚せしめ、公民とし婦人とし、自治的に家庭的に、村経済更生計画と之が実行上必要なる事項の強調に力めつつあり。

男女青年団又春秋の総会に、其他部落的に軍事農事其他精神作興の講演会を開き、又研究発表、共同研究地設置、基本金基本財産増成、其他青年学校の出席奨

励、禁酒禁煙、兵営視察、結婚費の節約等の事業実行につとむ。殊に蓄積金、植林、結婚費の節約、炭の採取出荷、制服の制定等見るべきものあり。

四 公民館の時代

日本は敗れた。しかしともかくも戦争は終わった。信じていたものを否定されて空っぽになった心に、逆転した価値観を受け入れなければならなかった。

戦争末期に解消を余儀なくさせられていた青年団、婦人会は地域社会教育団体として自主的な再発足をした。そこへ全く新しい団体が社会教育団体に加わった。PTAである。学校の保護者会、父兄会とは別種の、アメリカから輸入された、以前に類を見ない団体だった。いま一つは子ども会である。

これらの団体に対して、あらゆる場と機会に、GHQ（連合軍総司令部）は眼の色の異なる講師を派遣し、映画を上映して、民主主義を叩き込んだ。

人びとははじめて手にした自由に、急速に馴れていった。とくに若い者は心の飢えを満たそうとした。いかに

生くべきかの探求とともに、手っとり早く身近かに楽しいものということになるとスポーツであり、映画に、歌に、ダンスにと解放を求めた。青年団は演劇活動を柱の一つにした。長脇差に三度笠という股旅物が好んで上演されたりもした。その中から文化への目が開かれて行った。

婦人会は戦後の困難な生活を乗り切るための、様々な活動が要請された。冠婚葬祭の簡素化、育児や家政の実践などの生活改善が主要な問題だった。

こういう諸活動の拠点になったのが、公民館だった。昭和二十四年六月に公布された社会教育法は、別名公民館法といわれたほど、社会教育に於ける公民館の重要な役わりを規定していた。市町村は教育委員会に社会教育主事をおき、公立の公民館を設置して公民館主事を配し、主体的に社会教育を行うとともに、住民の自主的な活動を援助することになった。

昭和二六年、三花地区にも市立の公民館が設置された。はじめは公民館の建物はなく、主事も他地区と兼任だったが、昭和三〇年に藤山町の町内公民館の寄贈を受けて、専任の公民館主事が入った。館長には地区の人が非常勤

で就任した。

地区公民館は地区内の各地域へ出かけて学習会を開いたり、人びとの活動を指導したり援助したりした。

生活が安定して豊かになると、人びとの要求は多様になり高度になってくる。もはや一様の社会教育では満足できない。

地域奉仕に基を置いた青年団、婦人会はいまや崩壊したに等しい。その一方で壮年会、老人クラブや多数の目的団体が生まれている。

いま社会教育という名は、生涯教育という云い方に変えられた。当然そのあり方も変わっていくはずである。

第三節 子どもの風景

一 学校で

ここに色あせた数枚の写真がある。

明治四二年から昭和二七年までの、三和小学校の卒業

記念写真である。間とはびとびで、とくに戦争末期の数年を欠いている。

これを年代順に並べて見ていくと、学童の風俗の移り変わりがわかっておもしろい。

昭和初期までは男女とも羽織袴の和服である。男子は緋か縞の手織り、白線入りの学帽を早くからかぶっている。頭はもちろん丸坊主。女子は、明治期には黒の紋付に袴、髪を稚児髷のように結っている。その後男子と同様に緋や縞、そしてだんだん花模様などが混じってくる。

昭和に入ってお下げ髪になる。

昭和一〇年前後から急速に洋服に変わって、男子は詰襟、女子はセーラー服、なかにはセーターにスカート、おかっぱ髪という形になっている。

戦後は、男子は国防色の服に戦闘帽というのがちらほら、女子はモンペばきが大多数である

この写真では卒業記念だから羽織袴でかしこまっているが、ふだんの通常には着物で藁草履。雨の日などは草履がぐちゃぐちゃになって裸足で帰った。鼻をふくので着物の袖口はぴかぴか。

教科書は弁当といっしょに風呂敷に包んで、肩から斜

めに背負うか、腰の周りに結びつけた。その後雑糞のうといって布の鞆に長い紐をつけて肩から掛けた。昭和初期には、洋服といっしょにランドセルを背負った子どもが出て来る。草履に代わって布靴が登場する。

明治二三年「教育ニ関スル勅語」を發布。文部省はその写しと、御真影と呼んだ天皇・皇后の肖像写真とを各



花月小学校奉安殿を遷した市ノ瀬の大師堂

学校に下付した。三和校には明治四三年、花月校には昭和三年に下付され、校庭に奉安殿をつくって安置した。正月などの祝日には、講堂に飾って礼拝、校長が勅語を重々しく朗読した。しんと静まった中で、鼻をすする音があつちこちで聞こえた。

男女がひとつ教室で勉強したが、席は分かれていた。

国語、算術などにあまり変わりはないが、唱歌をはじめはオルガンなどないから、先生の振る鞭に合わせてうたった。まさに「雀の学校」である。

中学では詰襟の洋服が制服になっていた。日田中学は霜降り、林工学校と工芸学校が黒の詰襟で通学した。

二 学校の「思い出」から

小学校の開校百年記念誌に、卒業生から寄せられた文章の中から、少し拾って学校生活を見てみよう。

まず「花月小学校百年のあゆみ」から

学校への登下校ものんびりしたものでした。その当時の制度に、各学年に一人、監督が任命されてい

ました。成績が良くても愚坊主には任命しないようでした。

(明治三十一年卒 木下市郎)

当時秋原町の上部落^(マモ)にあり、本校舎一棟と別に東一〇〇米の所に民家一棟、職員室は校舎より西に五〇米くらいの民家の一室を借っていて、運動場は校舎と職員室の中間に約三〇〇坪くらい有った程でした。

授業の始まる時は先生か小使いがいて、拍子木を打って知らせていたので大変でした。その頃生徒は皆着物で、天気の日は藁草履、雨天の時は雨傘か甚八笠でした。下駄といっても鼻緒はへうか竹の皮……。雪降りには毛布を冠るか頭をタオルで包んで行き、二〇吋^(イ)以上の時は全校休みでした。

二年生の時、村役場より鐘を贈ってもらい、知らずようになり、先生も生徒も大変な喜びでした。三年生の春、学校の近くより火が出て大火災となり、町内の数戸を残すだけで全部焼きました。幸にして校舎は無事でしたが、職員室は焼けてしまいました。火は家を焼き山まで拡がり、田舎では稀に見る大火

災でした。

(明治四四年卒 樽原軍一郎)

当時、学校は秋原にあり校舎が足りなかったのか、一般民家を借りていた。

現在村上末喜氏(宅)の座敷が教員室、その下に一五〇坪ぐらいの傾斜のある運動場(現在畑)をはさんで、二メートルぐらいの石垣の下に「下の学校」という三、四年生と五、六年生の二教室の校舎があった。校舎といっても南側に長い板縁とせまい出入口が二カ所あり、囲りはサマンコ(格子紙張り)で暗い教室であった。運動場と下の学校との間には、上り下りの通り道に小さな土橋がかけられていた。さらに下の学校から畑の石ころ道を七、八〇メートル東に、現在村上勝氏(宅)の座と座敷の二部屋を借りて一、二年生の教室「上の学校」があった。

子どもたちは休み時間になると、教員室下の運動場に集まり、その両端にある柿の木とハゼの木の二本を本陣にして、よく陣取り遊びをしていた。

私も子どもの服装は自家製木綿織の着物に下駄か草履、足中で来る者もあった。先生は長着に袴は

き、後に詰襟の洋服を着る時もあった。

弁当はにぎり飯を竹の皮につつみ、梅干、つけ物がおかずであった。

勉強は読本、算術、理科、地理、歴史、修身、書き方、唱歌、綴り方があり、低学年では石板、石筆を使い、高学年になるとノートを使っていた。それらをふる敷につつむか、自家製の雑のうに入れていた。

学校には備えつけの雨傘があり、雨が降り出すとそれをさして帰り、次の日に返していた。大雨、大雪などの日は、はき物などがなく、学校に行けないこともあった。

女子は弟や妹を連れて、子守片手に学校に来る者もいた。
(大正二年卒 財津虎次)

当時一〇〇名足らずの生徒数で複式学級でした。旧校舎で表と裏に二本の大きな銀杏がありました。実もなっていました。夏はこの木陰の下でよく遊びました。校舎の窓側にそって大きな桜の木が立並んでいました。その両方の木を陣にして「陣取りごっ

こ」や「鬼ごっこ」の遊びをよくしました。お昼の休みも忘れてしまう程に……。

入学式には紋付の着物に焦茶の袴をつけ、手を引かれて校門をくぐりました。——よく祝祭日が行な



大正11年 日田郡小学校連合体育会
400m リレー優勝の三和小6年女子チーム

女子で初めての運動着で、襦袢にシゴキの帯

われました。一月一日の拝賀式後おみかんをもらうは、とっても楽しい思いでした。

春の伏木野の遠足、夏はすぐれ淵へ水泳に、すみきった川面にメダカを追っかけ、大きな石の上から何べんも飛び込んで、時の経つのも忘れるまで泳いだこと、夏の夜は部落学芸会で鉛筆を^{（マ）}ごほうびにもらえて懸命に練習していました。秋の運動会は大行事でした。冬は先生が皆を集めて童話の本を読んで下さった。下級生も上級生と一緒に話が聞けてとっても楽しいものでした。

（昭和五年卒 後藤エミ）

次に「伏木小学校百年のあゆみ」から

冬ともなれば、一間位もある長い太箱火鉢二個に火をたき、寒い伏木の冬を過^{（マ）}ごしております。当時は学校に行くにしても子供の気まかせで、気が進めば学校に行き、都合の悪い時は行かないという有様でありました。

私は五年生の一年間秋原の本校に通学し、後の六

年生は三和の住吉の学校に通学しました。——何様住吉まで通学のことにつき、昔のことで父親が栗の木の打割下駄を作ってくれ、ヘラで縄をない下駄の緒を立ててくれたのを、雨の日にははいていたが、何分共素人の細工で大変重いこと、問題にならなかった。天氣の良い日には藁草履を作ってくれたのをはいていたが、それも三日位で破れ、帰りには裸足になる始末で、親も非常に困った様子でありました。

（大正二年卒 梶原松雄）

当時の私達の学校は一年生より四年生までの複式学級で——学用品は石板に石筆、筆入れはなく、道具をフロシキに包み肩から斜にかつぎ、靴はなく藁草履、雨の日は下駄で、着物はハンテン、無パンツの通学でした。

校庭に大きな桜の木がたしか八本あって、春には美しく咲き、裏山の櫟林で鬼ごっこをして遊んだことが思い出されてなりません。現在のような運動器具は何一つ無く、コマまわし、ウチヨコシ位でした。

——遠足では日の丸弁当、味噌漬弁当が何よりのも

のでした。みかんとかお菓子を持って来る者は皆無
でした。

(大正一〇年卒 中川十郎)

一年生の時はまだ着物での通学が多く、何人かの
人が洋服を着てズックをはいていました。——ある
学年を教えている時は、他の学年は自習を静かにし
ていました。中には弟や妹を連れて学校に来ている
者もあり、子守りをしながら勉強するのは当然のこと
で、よく家の手伝いもしたものです。

家で珍しい物が出来れば、先ず学校の先生に
持って行くことが習慣になっていて、お正月や三月、
五月の節句の餅やチマキ、それから平常の時でもお
はぎ等よく祖母に包んでもらって、持って行ったも
のです。

四年生になると女子は毎週土曜日には、裁縫箱を
風呂敷に包み、背中に斜めに背負い、一ノ瀬の花月
小学校まで裁縫習いに歩いて通いました。——帰り
上級生と一緒にになり、男子とはよく喧嘩をしながら、
おなかをすかして帰ったものです。

(昭和一八年卒 梶原千勢子)

三 あそびと仕事

正月は男の子が年賀に行くと、縁起がいいといって蜜
柑をくれた。二日には大原さんへ初詣で。仕立下ろしの
手織りの着物に、これも下ろしたての下駄を履いて。

男の子は凧揚げ、独楽まわし。凧は手作りのほかに、
町でヨーカンベ(奴凧)を買って来た。独楽はもちろん
ケンカゴマである。女の子はおばあさんに作ってもらっ
た糸毬で毬つき。

雪の日など針金わなや高なわ(とりもちをぬった縄を張っ
ておく)をしかけて、山鳥、ヒヨドリなどを捕えた。
おとりで目白をつかまえて飼うものもあった。

三間足(竹馬)もよく作って乗った。小河内では花月
校まで、乗って登校もしたという。

少年倶楽部が創刊されたのは大正三年。昭和六年には
「のらくろ」の連載がはじまるが、三和校でも一〇二名、
教室に持つて来る者があり、まわし読みされて熱狂で迎
えられた。そのほかには小学館の学習雑誌「〇年生」が、
やはり一〇二名購読されていた。

間食はほとんどが家で作ったもので、ヤキゴメ（焼米）ソバカキ（蕎麦掻き）オシボウチョウ（やせうま）コウバシ（ハツタイ粉）ヘコヤキなど。オコシゴメは初午祭の露店で買つて来た。

山に行くときアケビ、クワノミ、ヤマイチゴなどがうまかった。

明月はミীগンチという。その供物の芋、豆、粟などをこつそりとってくるのもたのしみだった。

義務教育を卒^おえると、高等科や中学に進む者以外は、労働力として期待された。さし当って家では仕事のない者は奉公に出た。

女子は子守りや飯炊き。本土の紡績会社に行く者も少数だがあった。

男子は男衆や日傭とりで、山仕事や下駄挽き、丸太わき（製材）などの助手が多かった。

財津の浦塚茂は次のように書いている。

小学校卒業後は（中略）上の学校に行かれず、下駄挽（挽の誤りか）、塗物、襖張りの見習い、土方人夫等にも行き（中略）――

小学校（一三、四オ）の頃、土曜日午後から、他の人と共に薪木拾いに行き、杉の葉、バイラ、割木を拾って帰り、一荷に荷造りをして、翌日曜日午前六時頃から日田町に売りに行く。豆田から隈方面まで行き、普通一荷で三銭から五銭位で買ってもらった。（中略）こんな薪木代は小学校時代の学費であつた。一ヶ月十五銭か二十銭位あつたと思う。

また浦塚は、一四、五オの頃、おとなたちといっしょに、伏木の共有地に朝早くから干草切に出かけたり、車力（荷車）をひいて小野の山から隈まで材木の積み出しに行ったりして働いた、と書いている。

山仕事に行った子どもは、小屋に泊りこみで雑役をさせられた。暗くなるまで仕事をしてから夕食の支度にかかるので、手元がわからずに、ビキタ（蛙）やナメクジ、時にはガメゾーラ（亀の子たわし）が汁の中に入っていたりすることがあった。

風呂も川の水を汲んでわかすのだから、ハエやアブラメが浮かんていたこともあるという。

三和小学校 卒業写真



明治末年ごろの住吉校舎で、女子の卒業式

先生の丸髷、高等科の束髪、尋常科の稚児髷の風俗。校舎が民家屋だったようすもわかる。



明治 43 年度（44 年 3 月）高等科 3 回生



大正3年度(4年3月)
大正元年新築の校舎玄関



昭和6年度(7年3月)
「三和青年訓練所」の掲札が見える。
まだ男子も洋服は少ない。女子の洋装はただひとり。



昭和 11 年度（12 年 3 月）

男子は全部詰襟。女子も全部洋装となり、半数はセーラー服。



昭和 16 年（15 年度）

女子は全部セーラー服に、おカッパ髪。

花月小学校 卒業写真



明治末期から大正初期ごろ

「花月尋常小学校」「花月農業補修学校」の掲札がかかっている。



大正 15 年度（昭和 2 年 3 月か）

小さい「花月青年訓練所」の掲札。男子に洋服がちらほら。



昭和 10 年度 (11 年 3 月)
まだ和服の男子も見える。



昭和 21 年度 (22 年 3 月)
掲札は「花月国民学校」。二宮金次郎の像も。そしてモンペ姿の女子。

第四節 文化と文化財

文化ということばはよく使われるけれども、文化財と
いうのは何だろうか。

人間があれこれと生活をしていくと、そこには何かの
動きがあり、そして動いた結果として、一つの価値が産
まれる。とくに精神的活動をしたときに、文化がうまれ、
その目に見える結果として、物が産み出される。

これを文化財とよぶ。

つまり文化財というのは、人間の精神活動が創り出し
たもので、その時代時代の人びとの考え方、その行動の
跡を示してくれているものだ。人間の考え方、これに基
いた行動の跡とは、歴史そのものである。

文化財は大むかしからの歴史の具現者、証言者として、
私たちの眼の前におかれているのである。

私たちは文化財を見るときに、それを産み出した人び
との心、時代の動きをも、ちゃんと見取っておかなけれ
ばならない。

三花にある文化財は、私たちの先人が何を考え、どう
生きたのだろうかを考える、手掛りを与えてくれている。

一 古代の生活用具

第二章で述べたように、私たちの三花地区には、古代
の遺跡が何箇所も在^あって、遺物が発見されている。いや、
遺物が発見されて、そこに遺跡があることが確認された、
ということであろう。

遺物が私たちの眼の前に出て来て、そこにむかしの人
びとの生活があったことを、教えてくれている。

だから、どんなに小さな土器のかけらでも、欠けた石
の鏃^{やじり}でも、大切な文化財だけれども、ここでは文化とい
うことは持つ、もう一つの、精神的な価値の高さ、と
いう点からも、見逃せないものについて、取りあげてみ
たい。

先ず、三花の古代史は、弥生時代後期から始まり、古
墳時代へと至る。

(1) 石包丁^{いしほうちよう}

弥生時代を代表するのは、山田原で発見されたという

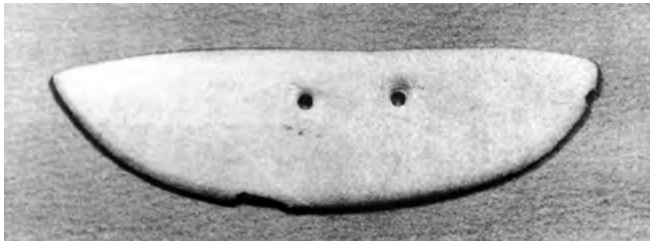
石包丁である。

ここで山田原というのは、出土地が確定されていないため、羽野原から用松原を含むかなり宏大な地域を指す呼称として用いる。

さて、考古学という石包丁は、包丁という名がついてはいるが、物を捌く道具ではない。写真のように半月型の石器の中央部に穴を二つあけて、これに紐を通して指にかけ、作物の穂を摘み取って、収穫したものでろうとされている。

山田原は水の便があまりよくないから、陸稲や粟などを作っていたらうか。

石包丁は各地の遺跡から採取されているので、珍しいものではないが、これは最大の長さが二四・五センチ、巾は七センチ、厚さ〇・八セ



山田原出土の弥生時代石包丁

ンチという大型で、たいへん力強い。

表面は滑らかに磨かれており（磨製石器という）、円弧の縁は薄く刃をつけたようになっていて、

山田原は農耕文化を持った人びとが住んでいて、稔り豊かなところだったに違いない。

山田原では、他に石鏃、石剣などの石器類も採取されている。

(2) 鉄剣

昭和五五年の秋、山田原の迫から、鉄剣二口と刀子一本が発見された。

迫に牧場がある。そこへトラックを通すための、道路拡張工事の際に、山を削った跡に横穴が現われた。牧場主が倉庫代りに道具類などを納めてあったが、穴を掘げようとして掘ったら、土中から出たのである。

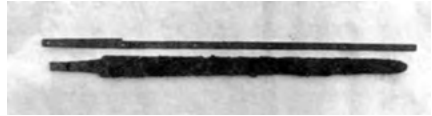
穴の中は朱で塗られ、工事のときには砕けた土器片が出て来ていた、という。

横穴墳があつたに違いなく、前半部が工事で削りとられていたのだろう。

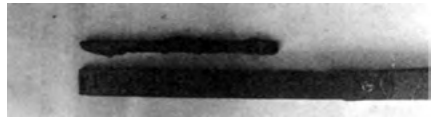
鏡や玉などもあつたのかもしれないが、もう確かめるすべはない。



山田原出土の鉄剣（短）



山田原出土の鉄剣（長）



山田原出土の刀子

それでも剣だけでも残ったのは、幸いだったとすべきだろう。

鉄剣は長さハ一センチと六一センチ。腐蝕して錆びついてしまっているが、袋と思われる布らしいものが、僅かに付着していたようだ。

鉄剣は、直刀と同じように刀身が真っすぐであるが、片刃ではなく両刃である。戦闘用の武器というよりも、文官のサーベルのように、儀礼用である。

刀子は小柄こがらのようなもので、いわばナイフである。長

さ一・五センチ。

鉄剣の出土は、日田では記録にあっても、実物が存在することは珍しい。横穴墳もこの近辺にもっと存在したであろうことは、充分にあり得ることである。

羽野原から用松原にかけて、円墳や横穴墳があり、土器だけでなく剣が出土していることは、この台地の性格を考えるうえで、重要なヒントである。小さくともある程度の力を持った首長に支配された、農耕集団があった——ということである。

(3) 土器類

三花の各地区から採取される土器は、土師器はじきと須恵器すえきである。弥生土器はほとんど発見されていない。

土師器はろくろを使って成型するが、窯の温度が低いために、赤褐色に焼ける。須恵器では温度が高いため、黒灰色に固く締まる。

土器が集中的に発見されるのは、羽野原の横穴墳と用松原の土壇や住居跡である。

地元の人の話では、開拓の際にいくらでも掘り出されたので、碎けたかけらを集めて、まとめて捨てたということだ。また、横穴墳を掘りにいって、完形に近い土器

を持って帰ったこともある、という。

また、市内個人所有の壺は、場所を特定することはできないが、住吉近辺の崖地から出土したと思われる。高さ一三センチ、胴の直径一〇・七センチほどの小さな扁平壺だが、形がよく調い、窯の中で自然に釉がかかって、真っ黒な色を呈している。



住吉から出土の壺（堤瓶）

昭和六〇年に調査を行った羽野横穴墳群からは、坏・高坏・瓶・壺等の土器、および勾玉・ガラス玉などが出土している。

なかでも第一号墳にあった甕は、約四分の一ほど欠け

胴は、ろくろで成形した跡が、同心円状の痕となつて残っている。

小さいながら引き締まつた、可愛らしい感じの壺である。

ていたが、胴の径が二〇センチに近い大型である。

甕というのは、ふくらんだ胴の中央にあけた穴に、竹の管を挿して、その口から、酒など中の液体を他の容器に注ぐ。急須のような役目をする須恵器である。

口、頸、胴の周囲に、数条の波型の文様を刻む。堂々とした姿から見ても、やはりこのあたりの豪族の存在を物語っている、といえるだろう。

この横穴墳は五世紀後半頃の造営と見られている。

二 中世の仏像

中世の三花が記録のうえで明らかになってくるのは、大蔵永清が財津に居を構えて、財津氏を名乗ってからである。

それ以前の三花の状態は、歴史的にも文化面から見てもほとんどわからない、といわなければならない。

史跡としては、財津氏の居城であった藤山城跡、羽野氏の羽野城跡があるが、文化財として見るべきものはない。

羽野天満宮については、「伝説」の項で述べるが、こ

こにある石造物等は、すべて近世のものである。

中世後期になって、見るべきものは、仏像群である。

竜林寺薬師寺如来坐像

財津から竜体山へ登る道の傍らに、一字の堂がある。竜林寺である。今は無住だが、その本尊が、第二章で述べたように、財津永満にまつわる薬師如来像である。

版木に彫られた

竜林寺薬師如来縁起を彫った版木

縁起がある。記録のために、次に全文を掲げておく。原文のとおりだが、ただ読み易いように、漢字の読み、仮名の漢字化等を（ ）の中に示し、適当に句読点を施した。

薬師如来略縁起

抑（そもそも）日田郡財津村龍川寺境内端雲山龍林寺薬師如来の由来をくハ（詳）しく尋（たずぬ）るに、人王五十四代仁明天皇の御宇、慈覚大師承和五年入唐したま（給）ひ、帰朝の時筑前国博多冷泉の津に着岸ましまし、しばらく旅船のつか（疲）れをやす（憩）めたまひける時、同国宗像郡吉田村屏風山鎮国寺に靈仏ましますとの御告を蒙（こうむ）り、夫（それ）より急ぎ彼地へおもむ（赴）きたまひけるに、此寺の御本尊ハ（は）かたしけ（忝）なくも伝教大師弘法大師御作の弥陀釈迦の御尊像なりける。つゝし（謹）みうやま（敬）ひ拝し奉り、此寺にしはら（暫）くとうりう（逗留）の内に、あるよ（夜）異人来てつ（告）けて曰（いわく）、此田嶋川上ミ（かみ）にこと（殊）なる栢（かや）の木有（あり）、此木をとって師の願望の尊像を彫刻（ほり）給ふへし、といふてかきけ（掻き消）すよふ（様）にう（失）せけるとなり。時に大師きい（奇異）のおも（思）ひをなし、急ぎ彼（かの）川上にたづね行（ゆき）見給ふに、一本の栢の木有。其所の里人に問（とい）給ふに、此木よ（世）のつね（常）ならず光りをはな（放）ちける、と

こそこた（答）へけれハ、まことに異人の告（つぐ）る所ふしき（不思議）也と感したまひ、それより此木を七段となし、みつか（自）ら一刀三礼の七仏薬師を彫刻たまひ、御願つゝか（恙）なく成就しけると也。それより御一鉢ハ御身をはな（離）たす御尊敬有しか、其後比叡山への御心ざし（志）有て、中国より御船にめ（召）され、御上り有し時、周防の国山口の沖にて東風しきりにふ（吹）いて御ふね（船）もあやふ（危）く有けれども、御仏の加護にやなミ（波）風しつ（静）まり、三田尻といふ所に付（着）給ひしが、地景すく（勝）れたりとて其所に草庵をむす（結）ひ薬師如来をあんち（安置）し給ふ。扱（さて）又如来当国へ来跡の濫觴（らんしょう）ハ、当国府内の大主（守）大友義鎮公の家臣財津長門守、堤弾正少輔と地をあらそ（競）ひし事有て、一たひ（度）ハか（勝）つ事を決しけれども、長門守ついに打ま（負）け、こと（殊）に義鎮公の勘気を蒙り周防国山口といふ所に蟄居せられけると也。長門守つね（常）に薬師仏を信じけるが、仏力をうこ（擁護）あやま（誤）たす義鎮公よりめしかへ（召返）され、ふたた（再）び領地日田郡へ安堵（あんど）す。幸なるかな、今の龍林寺に御仏を安

置し給ひけるとなり。靈驗區々なりといへど（雖）ものべかた（述難）し。くわしくハ本伝にあれば、是を略し早（おわん）ぬ。

皆（時、とき） 明和八辛卯三月吉日

日田郡財津

龍林寺

これによると、竜林寺はもともと竜川寺の境内にあつた小寺で、薬師如来像もそこに安置してあつたように受け取られる。それとも現在の地まで、以前は竜川寺の寺域と見られていたのだろうか。後考に俟ちたい。

この像は櫃材ぐさの三部寄せ木造り。像の高さ八三センチ、膝の幅は六七センチ。

右手を胸前に掲げて施無異印ぜむいを結び、左手は膝に置いて宝珠を持ち、蓮華座の上に結珈趺坐けがふざする。専門家の説では、もとは別の如来像であつたのを、のちに薬師如来に彫り変えたのだらうということである。

頭、胴、膝の部分は、平安時代後期の地方仏師の手になると思われる。

したがって、縁起にある慈覚大師圓仁の作というのは、

ただちに受け入れるわけにはいかないようだ。

像底に墨書銘があるが、磨滅して判読することができない。しかし赤外線写真では

「金剛……周防……」

というような文字がころうじて読みとれるとのことである。

奉造立薬師蓮花座仏師猪熊神左衛門繩正大工江嶋太郎左衛門尉、願主取平嶋丹後守其外各助成所也

端雲山竜林寺 報室昌定

天文廿一年六月吉日

大旦那 財津長門守

武運長久子孫繁昌願所也

これらのことから財津永満が周防から奉持して帰ったという説話は、信じてよいと思われる。

現在の台座・光背・宝珠などは、江戸中期に補作されたもので

豊後国日田郡財津村端雲山竜林寺本尊

薬師如来 慈覚大師作

十二神雲慶作 新仏日光月光

宝永五戊子十二月十四日再興

願主 龍川寺八世法蓮社演譽上人代

竜林寺の木造薬師如来像



また『日田記』によると、蓮華座に次のような墨書があったとされる。

とする墨書銘がある。

やわらかそうな肉付きの、ふくよかな体軀、厳しい表

情ながら慈愛を湛えた相貌、半眼の瞳は人びとの頭上を越えて永遠の虚空を見つめているように見える。地方仏とはいえ、見事な像である。

中世の三花を代表する文化財といってよい。

毎年一〇月八日に開帳が行われ、集落の人びとはもちろん、遠方からも善男善女の参詣があつて、賑わつてゐる。

この如来像と同座の地藏菩薩立像は、高さ四八センチ。檜材の一木造りの簡略な造形で、室町時代の作という。

再興銘にある十二神将像は、いま龍川寺に安置されている。本体の高さが三二センチから三六センチほどの小像である。室町時代末期頃のものと思われる、薬師如来像が移つて来られてから、その属神としてあらためて造られたのではないだろうか。

この薬師如来像だけでなく、天文年間作の仏像が、日田のあちらこち各所に見られる。たとえば諸留の薬師如来、山田の大日如来、戸山の本地仏などのように。これに高瀬の板碑などの石造物まで加えると、その数は相当なものである。

それまでは、寺を営んで仏像を奉祀するということは、

永興寺や岳林寺のように、日田郡司である大蔵氏によつて行われて来た。

ところが、ここへ来て打ち続く戦乱の中で、大蔵氏の勢力が衰えて、地方の一族が少しずつ独立しはじめる。

明日の生命の保証のない彼ら武士が、蓄えた財力に依じて小規模ながら寺を建て、地方仏師の素朴な作でも仏像を祀つて、心の安住を求めたとしても、決して不思議ではない。

財津永満の場合も、遠流によつていつそうさういう動きを駆り立てられた、日田の地方武士の一人であつたといえよう。

薬師如来像は、縁起の版本とともに、日田市有形文化財に指定されている。

三 近世の文芸と文書

江戸時代に入ると、文化も特権階級のものから庶民にも親しいものとなってくる。

とくに元禄以降は、文芸であれ美術であれ、また芸能であれ、あらゆる人々に浸透し、観賞とともに創作も行

われるようになる。その端的な現われが、文人趣味の詩、書、画であり、もっとくだければ俳諧、狂歌、狂句というようなものである。

(1) 中村西国・鳳岡さいこく ほうこう

中村氏は財津・中村の出自であろうが、豆田に移って町年寄を勤める家柄であった。

西国はそういう意味では三花の出ではないが、元禄期の談林俳諧の一方の雄として、日田俳壇の実質上の祖といふべき人物である。

いま西国についてくわしくは述べないが、その墓が、前記薬師如来像の竜林寺裏手、中村家墓地にある。

さまざまの形でずらりと数十基並んだ墓群の、ほぼ中央に、

正面に「大圓卜幽鏡知」

側面は「元禄ハ己亥六月六日」と刻まれているのが、それとされる。

しかし墓石は風化して、文字が読み取りにくい。

西国の墓から向かって右へ、三基目が

「釈法香之塚」

という法名の墓がある。

西国の兄の四男で、中村家第四代を継ぎ、やはり俳人だった中村鳳岡の墓である。



俳人 中村西国の墓

墓地は、夏には丈なす草に覆われているが、吹上台地にある長野野紅、りん夫妻の墓とともに、日田俳壇の重要な人物として、西国の墓も守っていききたいものである。

(2) 俳諧の記録

俳諧は庶民のなぐさみであるだけに、その記録は、特殊な宗匠格の人や選句集など何かの機会がなければ、全く残されていないことが多い。

選句集の一例に、中村西国の門人で豆田出身の田間鵠立が、元禄八年に上梓した「水仙畑」という句集に、隈町・内河野・山田・玖珠・杷木・宝珠山などの人々に並んで、三花の四人の笠句が掲げられている。

笠句というのは上句五文字が出題されていて下に適当な言葉をつけて、一句を完成するもの。

似合ぬハ草花売の長刀

財津 永応

しられぬハ鳥獸の死所

同 永継

うすうす蝶の羽かろし恰比

同 永胤

雨の夜ハ法花宿かる阿弥陀堂

秋原 永照

永の字がついているところを見ると、財津氏の一族であったことは確かだが、これが本名だとして、財津氏系図に該当する名前を見出だすことができない。

それから半世紀ほど経た頃の、財津文書に、数人の俳号が書きとめられている。

永き日の恵も深し麦の鮭

露嶺

この露嶺が、かねて手に入れてあった荒蕪地を開拓して、耕地とした祝いに、仲間の俳人たちが、句を贈っている。

財津氏明和（二年。一七六五）開発の

大成就を祝し奉りて

水の作る文字も弥々淡路島

雀水

堰留て花に声添ふ千地見島

茂文

鳥も来た儘に転れ田植時

秋吹（つ）山

露嶺というのは、財津家の当主、つまり藤山村の庄屋である。

杜有、翠車、蟹洞、可水、帰童

という名の句もあり、その中には

花月庵梅車

とあるところからして、これらの人びとが、藤山・財津近辺の俳諧連中ではなかったか、と考えることができるだろう。

俳諧は三花の庶民にも、これだけポピュラーなもの

なっていた。

さらに、江戸末期から明治初年にかけて、日田の俳壇に多くの人びとの名前が知られている。その中に、三花出身として

梅翠、山月、起雲、春香、風香、竹露、五柳、花村、石橋といった人名が挙げられている。

しかしこの人びとがどんな人物で、どんな句を詠んだか、となると、なかなかわからない。

また、明治一五年、山田の「大行事神社奉納発句額」というものがある。

神社に、日田各地の俳人たちが奉納した百句を書きあげたものだが、山田、亀山、草場、西山、大原、永山、南山などの地域からの句とともに

北山

という地域からの俳人の名の句がある。

これは三花地区を含めた旧幕府時代の小野筋にあたる地域で、地域の名というよりも、俳諧の地域的組連と見た方がよいだろう。

そしてこの作者名の中には、前記の三花俳人の名はないのだが、小野地区は句作の盛んなどころで、北山蕉

風会というグループがあったそうである。その会に、三花の俳人たちも参加していたか、どうか。

竜川寺にも天保一二年の奉納句額が掲げられているが、墨書がほとんど消えてしまっているので、判読が困難である。

心当たりの方の注意によって、今後の解明が期待されるところである。

(3) 詩文

三花地区から咸宜園に入門した人びとの中には、咸宜園の課目の一つだった漢詩文に、巧みな人も出たに違いない。

ここでは最も知られた三人を挙げる。業績については、



竜川寺俳句額

第五章「人物」の項で述べることにして、その作品について、特に優れたものということでなく、とりあえず目についたままを、一く二挙げることとしたい。詩と詠とを掲げる。

はじめに、菅樵禪和尚。

樵禪は彦山の修験僧で、菅相寺に来て、咸宜園に入門。期間は短かったが、師淡窓にも学力を認められた。詩とともに名書家として知られ、気概のある書風である。

早朝

珠履玉珂相逐行 樹梢残月尚微明

朱門影浸御溝水 宿鷺驚飛金鑰声

続くあしおと蹺音馬の鈴

梢に残る月かすか

溝に映るは朱の門あけ

鷺おどろかす鍵の音

高取成章

用松の照妙寺に生まれる。咸宜園都講となり、後に、日田・大分・佐賀各県の官吏となり、晩年帰郷した。詩

文ともに巧みだった。

柳暗花明景 春風一瞬中

能縁唯有識 色境本来空

柳の緑に花は映え

ふと吹き渡る春の風

確かにそれと知るとても

形あるものすべて空

高取悦堂

成章の弟。司法官となる。詩作は多く、また書に長じていたので、地区内にも、成章・悦堂兄弟の書を所持しているところは、多いであろう。

湾口波高暗暮雲 一声汽笛不堪聞

吟身纏絆無涯恨 別昨梅花今君送

入江の波に夕雲暗く

出船の汽笛に耳ふさぐ

無限の絆を吟詠に托し

梅散る今や君を送る

四 その他の文化財

中世では、前期のほか、次のような仏像がある。

伏木阿弥陀堂の阿弥陀如来立像

所伝によれば、鎌倉時代以前の作で、平家の落人がもたらしたもの、とのことである。

元文初年に京に修理に出した際に、顔の半面が割りとられた、という話が付いている。

ただし、未だ学術調査を経ていないので、確証は得られていない。

壁野権現社の本地仏

三所権現の本地仏である、阿弥陀、釈迦、観音の諸仏と、吉祥天との四鉢。

高さは三〇センチから三七センチ。

ほとんど素人の手になるものかと思われるほど、稚拙で、虫喰いなどの損傷が著しい。

このような仏像神像の類は、まだまだあちこちにあるだろう。石像はまだしも、木像は湿気、乾燥、虫災害、いずれにしても傷みやすいので、今のうちにすべて調査

記録して、できれば保存をはかっていきたい。



伏木の阿弥陀如来像

次に、近世になると、

羽野天満宮の豪潮宝篋印塔

豪潮は肥後出身の傑僧で、日田にも数度来錫している。広瀬淡窓の妹アリが、病身の兄に代わって祈祷を受けたことがある。各地を巡って、一万塔の宝篋印塔を建立しようと、力を尽くした。

天満宮社殿の向かって右下、太子堂の傍に、隅飾突起が花弁のように開いた、特徴のある塔が建っている。享和三年（一八〇三）の年紀がある。

豪潮の宝篋印塔は、彦山参道傍の巨大な塔が有名だが、

日田でも、このほかに、慈眼山、豆田榎茶屋、坂本毘沙門天堂、銭淵観音堂、護願寺など十数個所にある。



羽野天満宮の豪湖律師宝篋印塔

羽野天満宮の筆塚

社殿の向かって左に、自然石の、地から湧き上ったような形の碑がある。

広瀬淡窓の父桃秋は、筆が巧みで、代官所や近所の子どもたちに、手習いを教えていた。使い古しの筆を集めて、天満宮に奉納し、埋めた上に石の塚を立てたのが、これである。

筆塚 広瀬貞恒 七十七歳 拝書

と、桃秋自身の、何ともまろやかな文字で、彫ってある。毎年七夕の日には、天神町の子ども会が習字を奉納して、筆塚祭りを行っている



広瀬桃秋奉献の羽野天満宮筆塚

次に三花地区には、あまり文書が残っていないが、その中で注目すべきものに、財津文書と財津氏系図がある。

財津文書

グループが二つあって、一つは中世財津氏に関する文書類。

これは財津永満

嫡流の子孫が所持していたが、熊本細川藩に仕えたために、この文書も日田から出て、今は東京にある。

第二のグループは、藤山、台村庄屋であった財津氏に伝わった文書で、天文頃から明治中期までの、主として^{じかた}地方文書類。総数約一二〇〇通。内容は年貢関係が約二七〇で、最も多い。あとは借用証文などの金融関係が約一七〇、そのほか、となっている。

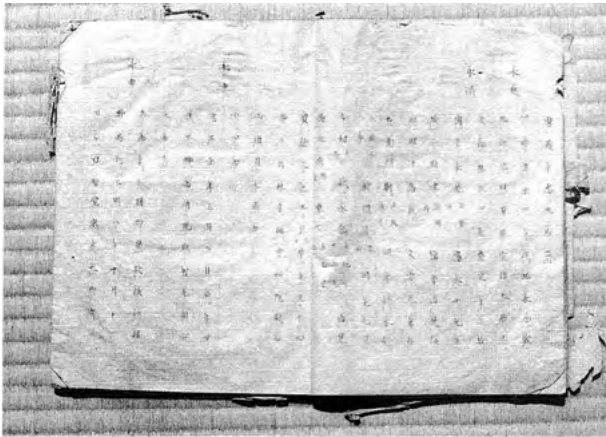
このグループも、当主が福岡に在住しているために、日田には、ない。

財津氏系図

前述の財津文書の中にも数種類が含まれているが、竜川寺に伝わるものは、美濃判薄様紙七五葉を綴じた冊子に書かれている。

数種類と同氏系図のうち、原本に近いものではないか、とされている。

文化財を見る場合、それぞれの時代を代表するものを、歴史と関連づけてみるのが、わかりやすい



財津氏系図

だろう。

その意味で、時代毎の三花を象徴する文化財を挙げる
とすれば

古代では、石包丁や用松古墳に示される用松原遺跡
中世では、竜林寺薬師如来像

近世では、石坂

となるだろう。

いずれも、私たち三花人の心の
支えとして、誇ってよいものとい
うべきである。

なお、石坂は大分県史跡に指定
されている文化財であるが、「交
通」の項（一六八ページ参照）で述
べられているので、この節では触
れなかった。参照されたい。